

辞表提出と「プラハの春」に適切なアドバイス

近藤 節夫（63年卒）

1. 海外ひとり旅と退職の決意

「光陰流水の如し」

あれから早や半世紀近い歳月が流れた。1968年早春飯田先生のお宅を訪れ、そのころ真剣に悩んでいた人生の進路について先生にご相談した。静かに私の話をお聞きになられた先生も、思いも寄らぬ深刻な話に少々驚かれたようだった。

その当時私は鉄道会社経理部で来る日も来る日も繰り返される単純なデスクワークの中に埋もれ、思想の自由や個人的な言動まで束縛される、年功序列の職場のプレッシャーに押しつぶされそうな気持ちになっていた。そしてがんじがらめの鉄道経理の基本である「保守主義の原則」を鵜呑みにするような「物言わぬ伝統」に、やや疑問を感じていた時、職場のある先輩から私の個人的な行動について、いくつか辛辣な「教育的指導」を受けたのである。

そのひとつは、知人が車を他の私鉄電車に衝突させた事故について、自事故係を通して相手の会社へ穏便な処置をお願いし、奔走した私の行為が、両社に多大な負担を課し節度を越えていると厳しく注意されたのだ。

更に、会社の合理化協議会事務局が全社員から募った合理化提案に対して、幸運にも私の他部門へ向けた提案が採用されたにも拘わらず、評価

されるどころか、反って自分の仕事や義務に全力投球せず本業以外に熱を入れてみると誤解され、なじられたのである。このあまりにも理不尽な物言いに愕然とするともに、悲憤慷慨した。業務上のことで説教されるならまだしも、通常業務とはかけ離れたとは言え、プライバシー面でタテ社会の規律に縛られて自由な振る舞いや創造性まで封印されることにはどうにも我慢がならなかった。保守的な年功序列の職場環境の下で先輩たちに押さえつけられ、毎日息が詰まるような空気の中で、その不条理に憤り、半ば投げやりな気持ちに陥っていた。

入社後1年半に亘る駅の1昼夜交代勤務、出改札業務、手小荷物取り扱い、踏み切り臨時警備、駅及び周辺の清掃、突発的な人身事故処理、通常の苦情処理、時には3昼夜連続勤務など、肉体的にも厳しい現場修行を終え、後れてやってきた学卒社員に対して、本社内で個人の自由まで押さえつけようとする年功序列の壁と捷、そして陰湿としか思えないような対応は、60年安保闘争を闘い、それまでささやかなれども自由と民主化のために行動してきたと自負していた身には耐えられなかった。息の詰まるような環境の中で自由な創造性やチャレンジャー・スピリットも発揮できず、毎日悶々としながら一向に前向きな気分になれず、精神的にも鬱積した気分のまま将来への明るい展望や、自主的で建設的な飛躍は見出せそうになく、失望感に襲われ次第に会社への決別を考えるようになっていった。

学生時代の60年安保闘争の余韻と挫折感から未だ逃れられず、社会人になってからも小田実著「何でも見てやろう」に影響され、またベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の略）のベトナム反戦運動にも刺激され、その鬱憤を晴らすようにベトナム反戦運動にのめりこんでいった。

連日苛まされる仕事の苦痛や職場環境の鬱陶しさから逃れるように、66年しがらみを捨て登山ザックを背負ってひとり海外へ旅立った。そしてひとりさまよったその旅で、思いも寄らぬそれまでの人生で味わったことがない、背筋が凍るような怖い体験をしてはつと目を覚まされたのである。

旅の始めから仰天するような未曾有の危険が身の上に降りかかってくる。汚職に塗れたスカルノ政権末期の治安の乱れたインドネシアの首都ジャカルタで、深夜ホテルへ向かう途上タクシーの運転手に暗がりへ連れ込まれ、恫喝されたり、白昼公衆注視の中で若い男に背後から馬乗りになられて腕をねじ伏せられ腕時計を強奪される衝撃も味わった。

その数日後あの衝撃的なテロ攻勢の前に、日増しに激化する戦闘状態にあつた南ベトナムへ入り、首都サイゴンの米軍宿舍前で米兵に銃口を向けられたり、サイレンを鳴らして走り回る軍用車と時折聞こえてくる砲弾の音に、神経がぴりぴりする臨場感を直接体感したことによって、戦火に晒された庶民の生活や混乱した社会秩序、そして死と背中合わせの戦争の怖さを嫌というほど肌感じた。同時に、これこそが現実なのだと思った。

この衝撃的だった臨場体験にも拘わらず、性懲りもなく翌67年には第3次中東戦争直後にアラブ、アフリカ、そして内戦が終結して独立したばかりのアラビア半島南端のアデン（現イエメン共和国）へ旅立った。

エジプト（当時アラブ連合）では、首都カイロから混雑する列車に乗って運河の街、スエズへ向かった。その当時戒厳令下のスエズでは市内滞在許可証が必要だったが、そんなこととは露知らず、その滞在許可証を持っていなかったために車内で武装警官に厳しい尋問をされ、滞在許可証不所持の身としてスエズ駅に着くや、そのまま警察署に連行され拘禁されてしまった。

さらに、ヨルダンでは驚天動地の危険に出食わしてしまった。スエズ同様に戒厳令下の首都アンマン市内で突如十数名のヨルダン軍兵士に取り囲まれ、胸元にライフル銃を突きつけられ身柄を拘束されてしまったのである。一瞬身体が凍りつき震えてきた。そして街のド真ん中で多くの市民が不安そうに見守る中を、両手を上げたまま手荒に引立てられる醜態を晒してしまつた。昼日中に首都の真つ只中でテロリスト扱いされることなど考えてもみず、しばらく現実と空想のギャップの陥穽に落ち込んだ（本年6月アンマンを再訪し、身柄拘束された現場を再検証して45年ぶりに宿願を果たした）。

だが、身柄を拘束され一歩間違えればこの世におさらばという、前代未聞のハプニングに遭遇したことによって、初めて現実の世界と現地に漂う生の臨場感を全身で知ることにもなった。まさにその時現場の空気を意識する臨場感こそが、実社会における行動規範として、また将来を見据え充実感に溢れた人生を送るためにも、絶対欠かすことができないものだと思ひ知らされたのである。

同時に、世界の生々しい現実を垣間見た充実感に、いままでとは異なるわくわくするような高揚感と躍動感を憶え、自分はこの先も思考停止状態のまま気の向かない仕事に、いつまでも「滅私奉公」の偽善的なポーズをとついても良いものだろうかとの疑問が湧いてきた。

いま思えば若気の至りではあつたが、将来における仕事や日常生活面でもより一層充実した生きがいを見出すためには、もっと他に大切なことがあるのではないかと考えた。それは、自らの手を汚さず「上から目線」で理屈だけを押しつける官僚的言動や、時に現場知らずの学者が「象牙の塔」から発信しようとする近視眼的発想、仕事場における前例踏襲の「保守主

義の原則」などより、もつとうごめく現場の臨場感に触れ、現場の空気を察知する感度を高めることが、これからの人生をより一層充実させて生きていくために大事なことだとの確信を深めるにいたった。

2. 迷える小羊の悩みと決断

この実りの多かった2度に亘るひとり旅の臨場体験が、その当時仕事と職場環境に悩んでいた私に、外の世界へさらに一步踏み出すよう強く背中を押してくれた。1960年代海外へ出かける日本人はまだごくまれで、況や単身で銃弾飛び交う危険な動乱の地を放浪する日本人は皆無と言っても良かった。実際旅行先で日本人と出会うことはほとんどなかった。

熾烈なベトナム戦争の空気を肌と感じ、それからもう一步踏み出してパレスチナ問題に揺れる中東の地で危険と紙一重の場面に直面した体験は、日本が豊かになりつつある中で、小市民的な楽しみを追うだけで善しとする安逸な気分になれなかった私に、冒険心と好奇心を抱え臨場感溢れる現実の世界を現地の人々の目線で直視することを迫った。

このように揺れ動く心境にあった時、恩師飯田先生の許を訪れたのである。最初に私の考えと計画を洗いざらいお話した時、流石に先生も深刻な顔をなされ、猪突猛進とも受け取られかねない私の将来計画にや、危うさを感じられたようで、その無謀さをしばし嗜められた。だが、お宅を辞する時には海外事情や留学生問題に関して詳しい清岡瑛一文学部教授に一度相談してみてもどうかと温かいアドバイスを下さり、清岡先生をご紹介いただいた。清岡先生に私の思いのたけを手紙に書いてしばらくすると、清岡先生から来られるなら相談に乗りましょうと親切なご返事をい

ただき、久しぶりに三田キャンパスを訪れ清岡先生に面談していただいた。

「あなたが近藤くん？ あなたの手紙を読んで話は大体分かりました。しかし、私はあなたの計画にはあまり賛成できません」と私の計画には最初から否定的だった。会社を辞めたいという私の逸るような気持ちと、見通しの立っていない留学計画について疑問を感じられたようで、もう一度冷静に考え直すよう諭された。

実は、その時私は秘かに当時のチェコスロバキアの首都プラハにある、14世紀創立の名門カレル大学への留学を考えていた。確かに清岡先生が危惧されたように、その時私には社会主義国チェコスロバキアに行っても、確実に目指す大学に入学できるという保証は何もなかった。入学許可証を持たず、現地へ到着してから入学許可を得た後にチェコスロバキアでマルクス経済学を学ぼうと漠然と考えてはいたが、師事する教授に格別な当てやコネがあるわけではなく、またその時まだ確たる研究テーマを抱えていたわけでもなかった。その志は善しとしても将来を見通せない、少々甘いとも思える計画には飯田先生も、清岡先生も一抹の不安と危惧を抱かれたようだった。もやもやした気持ちを抱いたまま清岡先生の許を辞した私は、それでも渡航計画を誰に話すこともなく、シベリア大陸経由でチェコスロバキアへ渡る準備を着々と進めていた。そして、恩師である飯田先生と福沢諭吉のお孫さんでもある清岡先生のご忠告に逆らうように、ある夏の暑い盛りに思い切った行動を起こした。直属の上司にいきなり辞表を提出したのである。

3. 「プラハの春」に心の迷い

ところが、中途半端な気持ちのまま留学計画が動き出したその僅か数ヶ

月後、突如として世界中を震撼させ、世界の歴史がひっくり返るようなセンセーショナルな大事件が勃発したのである。秘かにプラハ留学の準備を進めていた忘れもしない1968年8月20日、事態は急変した。あの衝撃的な「プラハの春」事件が勃発したのである。その日の払暁ソヴィエト連邦軍を中心とするワルシャワ条約機構軍戦車部隊が突如プラハ市内へ進軍してきた。社会主義国家の盟主であるソ連が、子飼いの東欧社会主義国同盟軍を引き連れ、同じ同盟国のひとつであるチエコスロバキアへ不法に侵略し、一夜のうち武力でチエコスロバキア全土を席捲、蹂躪してしまったのである。この二ユースは瞬く間に世界の隅々へ配信され世界中の人々を慄然とさせ、大きなショックを与えた。東西両陣営の激しい対立と抗争は事態を一層深刻化させ、平和は益々遠のいていった。

その当時ソ連の独裁的で厳しい監視下にあった東ヨーロッパの社会主義国家間では、それぞれに社会主義の矛盾が露呈して、次第に国内に亀裂が生じていた。独自に民主化への道を歩み始めていた社会主義国チエコスロバキアでは、ドブチェック・共産党第一書記による「自由」を採り入れた指導体制が一枚岩を強要するソ連指導部の逆鱗に触れ、それが武力による介入を許してしまったのである。民主化の芽が息吹き出したチエコスロバキアは、その日を境に再び時計の針を元へ戻すことになってしまった。

この「プラハの春」事件は、たちまちのうちに他の東ヨーロッパ社会主義国家へ伝播し、彼らの民主化への淡い希望も打ち砕いてしまった。そればかりでなく私が清水の舞台から飛び降りようとしていた、プラハへの留学計画をも根元からぶち壊してしまったのである。何という不運であり、理不尽であるうか。折悪しく勃発した世界史上の激震が私個人の秘かな人生設計まで

台無しにしてしまった。その夜遅く帰宅してニュース速報を耳にした時、一瞬わが耳を疑った。私はただ茫然としてその場に立ち尽くすばかりだった。

翌朝すぐさま飯田先生にこの危うくなった留学計画と、前途が不透明になった不安について簡潔にご報告した。先生もさぞお困りになられたのではないかと思う。世界史上エポック・メークな大事件のどばつちりを受けたとは言え、不肖の弟子が自ら招いた、将来がどう転ぶか判らない身の上相談である。それでも先生は改めて私の話に耳を傾けられ、私を気遣い優しく元気づけてくれた。しばらく考えられた末に先生は、上司にもう一度よく相談してみて、一旦提出した辞表を取り下げること考えてみてはどうかと、次善の策とも思えるご助言を与えて下さった。

そうして長い時間をかけ熟慮に熟慮を重ねた末に、苦渋の結論を捻り出した。他動的な原因で、喻え歩むべき道は戻されたにせよ、これからも自分の信念を曲げることなく再生する決意を抱いて人生をやり直すことに賭けてみようと思った。私は先生の温情の籠ったご助言をいただき踏ん切りをつけ、一度は提出した辞表を取り下げることにしたのである。

次の朝上司は私の辞表取り下げの申し出を聞くと、「なんだって？」と一瞬私を睨み、顔に幽かに怒りの表情を表わしたが、それでもすぐに私の辞表を机の抽斗からそと取り出して目の前に置き、ただ一言「君の辞表についてはまだ誰にも話していい。気持ちを切り替えて目の前の仕事にしっかりと取り組むように」と助言されただけだった。

私のわがままで自己本位の振る舞いに対して温かい理解と配慮を示してくれた当時の上司には、今も感謝の念が消えることはない。

4. 考えもしなかった旅行業への転進

翌69年私は社内人事により国内旅行部門へ異動した。そして国内旅行業務に勤しんで7年の月日が流れた。会社は将来を見据えた長期経営戦略の一環として、私が所属する国内旅行部門を鉄道会社から切り離し、新たに設立した海外旅行部門と併せて、総合旅行会社として発足させ、本格的に旅行業界に打って出るようになった。

その当時若手社員の中に海外旅行経験者がいなかった鉄道会社内で珍しく海外経験があった私は、直ちに新旅行会社へ出向することになり、海外旅行部門を起ち上げて永続的な新会社発展のための基盤作りに関わることになった。私にとつては思いがけないチャンス到来である。その時経理部時代にご迷惑をおかけした上司は、新会社へ出向する私に向かつて「旅行好きな君のために作った会社だ。立派な会社に育ててほしい」と肩を叩いて激励し祝福して、新しい旅行会社へ送り出してくれた。

新旅行会社では、海外旅行事業の将来像も見通せない中で荒波に漂う小舟に乗った気持ちだったが、幸い私の志向と旅行知識、そして感性にぴつたり合い、私が考えていたプランやアイデアを思い切つて活かすことができた。その時を境に爾来海外旅行業の企画と営業分野に30年近くに亘つて携わることになった。その間自らの信念を曲げることなく、好きな道を信ずるがまま持てる力を全身全霊で投入した。企画面では個性的にしてユニークで独創的なツアーを企画し、営業面では官公庁・企業をはじめ特殊な分野で新規顧客を開拓し、対外的にも日本旅行業協会より海外旅行業界の国家試験を管理監督する研修試験委員を委嘱され、また業界のご意見番として旅行業界紙などに持論を提言した。好きな旅行に従事するこ

とができて、企画と営業分野に精一杯力を注ぐことができたと思つている。

いま思い返してみるとこれまでの人生には何度となく、大きな浮き沈みと転機があった。鉄道会社から別の世界へ踏み出そうと思つた動機も、もとを糾せば、ベトナム戦争を起点に歩き始めた海外へのひとり旅と、当時の鬱積した感情から一念発起して別の道へ飛び出そうと考えたことがその原点にある。そのタイムリーなタイミングに偶々世界史上に一大センセーションを巻き起こした「プラハの春」という国際的な事件が身に降りかかり、遠回りしながらもめぐり巡つて海外旅行ビジネスの中に身を置く結果となり、時の経過とともに私なりに進むべき道を見出すことができたと言える。

5. 飯田先生の心の籠つた助言

飯田鼎著作集全8巻(御茶の水書房)をはじめ、私たちゼミ学生にとつてバイブルでもあった「イギリス労働運動の生成(有斐閣)など数多くの名著を世に出された先生には、執筆の面でも細かく懇切な指導をいただいた。処女出版「現代・海外武者修行のすすめ」の最終原稿を出版社へ送る直前に飯田先生に目を通していただいた。先生からはまもなく訂正箇所を朱文字で丁重なコメントが書かれた原稿が返送されてきた。そのコメントは、ひとつひとつのセンテンスが長過ぎるということと、文章に句読点が少ないのでやや読みにくいという率直で的確なアドバイスだった。改めて推敲したうえで出版社へ送稿した。

後日そのおかげで同書が少なからず江湖の評価を得て、「第1回開高健ノンフィクション賞」最終審査まで残り、結果的に選に洩れた折には、温かくお心の籠つたお便りをいただき、優しく慰め励ましてくださった。爾来先

生のお心の籠った教えを肝に銘じて文章を綴るよう心がけている。

飯田先生には、前記の悩み事などのご相談以外にも終生歩むべき方向を幾たびかご教示いただいた。最初にゼミ入会の面接に際して「貧乏物語」「自叙伝」など河上肇の著作を読んでいるとお話したら、ゼミに入ってから河上肇を研究してみなさいと的を射た温かいアドバイスをいただいた。そのおかげで拙いながらも何とか卒業論文「河上肇論」をまとめることができた。卒業後も大事な決断の都度ご相談したり、人生の節目ごとに先生に進むべき方向をお示しいただいた思い出は脳裏から消えることはない。深刻な悩みを打ち明けた「プラハの春」による挫折については、随分ご迷惑をおかけしたのではないかといまも申し訳ない気持ちで一杯である。

時を経て「プラハの春」発生当日からちょうど20年目の1988年8月20日、「プラハの春」20周年記念当日、奇しくも私はある視察団に同行してプラハに滞在していた。その日は朝からふた昔前の事件を想い感慨深い気持ちに捉われていた。陽が落ちる頃になってモルダウ川から涼風がそよびできたプラハの中心、ヴァーツラフ広場には時間の経過とともに、いずこからともなく大勢の市民が集まり、やがて彼らは群集となつて広場に満ち溢れ、次第に怒号と歓声が渦となつて沸きあがり、大きな空砲の音がこたまして、それは広場に面したホテルに滞在していた私の耳にも聞こえてきた。次第にその場の怒声と騒音は唸るように高まってきた。群集の叫びは民主化を求める大衆の自由を叫ぶ熱いデモとなった。群集は警備のため出動した警官隊や軍隊と小競り合いとなり、一触即発の危険な状況に立ち至った。

この時留学計画が挫折した20年前を思い、私は感慨無量の想いに捉われていた。興奮して気持ちの高ぶったまま、広場の熱気溢れる臨場感に引

き寄せられるようにホテルから一歩外へ踏み出そうとした、まさにその瞬間、ドアの一步手前でホテルの支配人に乱暴に体当たりされ、外出を制止されてしまったのである。その夜不測の事態を恐れたホテルは、全宿泊客に対して外出を足止めする禁足令を出したのだ。肌を感じるような熱気ははらんだ、新しい民主化を求めるデモの勢いは止むことがなく、私は行き場のない落ち着かない気持ちのまま、一晩中まんじりともできなかった。やがて外ではうつすらと夜が明けてきた。

この時明らかに20年前とは情勢は変化していた。力の衰えたソ連も今度ばかりはこの国の民主化のうねりを黙って見ているより成す術がなかった。その時プラハでそれとなく感じた新しい時代の空気は、果たして翌89年11月ビロード革命となつて湧き上がり、93年1月チエコスロバキアはチエコとスロバキアに分離し、やがて社会主義体制は崩壊への道を辿っていった。

偶然とは言いながら、結果的にやや自己本位で衝動的な行動から、世界史上のドラマと背中合わせの場に身を置く立場にあった。いま振り返ってみてもあの時代は政治的にも社会的にも世界は混沌とし、私にとっても血気盛んで振幅の激しかった自分史の貴重な一頁だったと思っている。

飯田先生の温かいお人柄と学究的で真摯な姿勢、そして先生から教えていただいた人生の歩み方と生き方が、あれやこれや世界史上に残った事件と融合しながら私の未熟な半生ともからみあつて、あのドラマチックな思い出は決して心から消えることはない。

私にとって飯田先生はとこしえに人生の師であり、心のふるさとだった。慶應義塾で先生の警咳に触れ、以降半世紀に亘り教えを乞うことができてつくづく幸せだったと心より感謝せずにはいられない。